

18 世紀後半の東欧・南ボヘミアにおける冷夏と不作の環境史：

再版農奴制の人口学的再検討

Environmental history of cold summer and poor harvest in South Bohemia, Eastern Europe: A demographic review of the Second Serfdom in the latter half of the 18th century

村山 聡 (香川大学)

Josef Grulich (南ボヘミア大学)

近世南ボヘミアに残存している「孤児記録簿」は一種のセンサスタイプの史料である。200 年以上継続的に残された記録は膨大な史料群となっている。現在のチェコ共和国に属する南ボヘミアでは、多くの旧体制下の領地において、16 世紀末から記載が始まる孤児記録簿が残されている。この種類の文書は、様々な形態があるにしても、ヨーロッパに共通する特有の近世文書であり、原則として、毎年あるいは数年の間隔を置いて記録されている。南ボヘミアの場合は、一般的にはグーツヘルシャフトが支配的な地域であるが故に、領主の官吏が孤児一人一人を労働力として掌握したと考えられている。グーツヘルシャフトというドイツ語で知られている支配関係が存在した地域は、一般的には、人的ならびに物的資源全体を掌握するような強固な支配関係が存在したと理解されている。

南ボヘミアの人口関係史料に詳しい共著者のヨゼフ・グルーリヒによると、17 世紀後半において、この記録簿は、孤児だけではなく、領民である「世帯」の全構成員が記載されるようになるという。村山自身も領地チェボニーに残されている史料を確認する限り、この史料群は、「孤児記録簿」(=Waisenbücher)、「臣民記録簿」(=Untertanenverzeichnisse)、「領民記録簿」(=Mannschaftsbücher)などと名称を変化させている。しかし、残存する文書群をすべて比較した限りにおいて、書式等に継続性があり、住民を把握するという点において、行政上、継続性のあるものと判断できる。200 年以上の期間、同一の形式で住民把握がなされていたのである。

16 世紀から 19 世紀にかけての時代は、住民把握や地域把握という点での史料存在の歴史において、独自の時代を示している。そして今回の焦点は、もう一つの史料群である。近世社会の死亡原因は従来から飢饉、疫病そして戦争という三大要因が議論されている。飢饉とまではいかなくとも穀物などの不作の最も重要な原因は冷夏であった。この冷夏による独特の記録がこれもまた 100 年レベルの長期にわたって残されている。ドイツ語では(南ボヘミアの歴史資料は上記と同様多くがドイツ語で書かれている。支配者がドイツ系の貴族であったからである。) Wetter-Schaden (天候被害) という史料で、被害のあった土地の一筆一筆、耕作人の氏名とともに通常の収穫からどの程度不作になったかについて詳細が記されている史料である。このような管理体制は上記の住民把握がほぼ完全になされるがゆえに管理しえた史料である。

本報告では、この個人あるいは世帯把握を根幹とする住民把握および地域把握の意味を環境史的および人口学的に解釈し、経済史研究における伝統的理解である再版農奴制再考として議論してみたい。